

特集

基礎薬学とエビデンスから おくすり比べてみました

科学の方法は、大胆な推測とそれを反駁しようとする 巧妙で厳しい試みの方法である¹⁾

哲学者、**カール・ライムント・ポパー**（1902～1994年）の言葉です。化学や生物学といった薬学の基礎をなす学問、あるいは薬理学や薬物動態学といった学問体系は、薬剤の治療効果に関する「大胆な推測」のよりどころになるものでしょう。物理法則が物体の運動現象を説明するように、科学の本質が人の解釈に依存しないということならば、基礎薬学的な理論から治療効果を推測することは、きわめて科学的な営みといえるかもしれません。

しかし、ポパーによれば理論から導き出された推測はあくまでも仮説であり、不変の真理ではありません。推測を反駁（はんぱく：論じ返すことの意）しようとする試みの方法こそが科学の本質というわけです。

いわゆるエビデンスとよばれるような臨床研究は、理論から導き出された推測に対する反駁の方法論です。重要なことは、臨床研究の結果と理論的な推測の結果は、必ずしも一致するわけではないということです。常識と謳われていた理論を覆した歴史的な研究については、「**えびさんぼ**」にまとめました。本特集と対比しながら読んでいただくと、より多くの示唆が得られるように思います。

ところで、臨床研究の結果は統計学的な観点から、集団の平均として薬剤効果を描き出します。基礎薬学的な理論との一貫性はともかく、平均は現実の日常生活には実在しないものです。少し考えてみてください。身の回りに平均とまったく同じ何かが存在するでしょうか？

薬剤の効果は、患者の生活環境に含まれるさまざまな変数（予後因子）の影響を受け、その発現の仕方は千差万別です。ある人にはよく効いた薬剤も、ほかの誰かには無効かもしれません。その意味でも、薬の効果に関する

不変の理論 (theory) は存在しません。

しかし、理論はなくとも**薬剤の効果を語る論理 (logic)**は存在するはずで
す。経営学者の楠木 健氏は『ストーリーとしての競争戦略』という本のなか
で、「**論理とは、『無意味』と『嘘』の間にあるものとして理解できます**」と述
べています²⁾。

「この薬は●●受容体に作用して▲▲を促すことで、××させる作用があ
ります」と語ることが、患者にとっていかに無意味であることは想像に容易
いでしょう。また、「この薬はむくみに効果があります」と語るとは嘘に
近いかもしれません。薬剤を飲んでも、むくみが改善しなかった人は存在す
るでしょうし、「むくみ」を曖昧に定義すれば、薬剤が効いたか効いていな
いかなんて、結局のところ誰にもわからないのですから。薬剤効果に物理学
のような法則がない以上、「この薬を飲めばこうなる」ということはありませ
ん。

楠木氏の論じる論理とは、**法則ではないが自明でもない、あらためて考え
てみるべき思考の構え**にほかなりません。本特集では、基礎薬学的な理論に
よって薬剤の特徴を大胆に比較したうえで、臨床研究の結果に基づく薬剤効
果の統計学的な比較を試みました。多様な観点から薬剤を比較した本特集
が、薬剤の効果を表現するための論理となりましたら幸いです。

中野病院 薬局
青島 周一

引用文献

- 1) カール・R・ポバー：客観的知識。p94。木鐸社。2004。
- 2) 楠木 建：ストーリーとしての競争戦略―優れた戦略の条件、p6。東洋経済新報社。2010。